わがマエストロ　入江直祐先生

中　内　正　夫

Meeting
Is parting——
冬の花

入江直祐先生は，刎頸の友ともいうべき小山捨男先生とご一緒に，新設された創価大学にいちはやく着任された。六十歳といえば，なかなか新天地に赴く決断などくだし難い，定着の時期だと思われるにもかかわらず，先生は断固たる決意で，こちらにお見えになったのであった。すばらしい名訳を通じて，お名前だけは存じ上げてはいたのだけれども，同じ大学で教鞭を執ることになろうなどとは夢にも思っていなかった。何という幸運であろう！

しかし，生涯の友たる小山先生に先立たれた先生の悲しみ，嘆きは，想像するに余りあるものがある。

「小山は，学生時代から酒ばかり飲んでいた。ぼくはもっぱらテニスをやってきた。その差が今ここに出てしまった」と，洩らされたときの先生の淋しそうな，お顔が忘れられない。先生が亡き友を想い出されぬ日は，一日としてないであろう！

入江先生は，稀に見る心優しいお人柄である。しかし，先生ご自身に対しては，きわめて厳しく律しておられるのであろうと思われてならない。

さて，もうかれこれ八，九年も前になるであろうか，「娘は切手収集に凝っているんです」と，私が言ったことがある。先生は，次にお会いしたとき，早速，珍しい外国切手を何枚も持ってきてくださった。それからというもの，今

日にいたるまで，外国の新しい切手が手に入るとすぐにも，先生はそれをご持参してくださるのである。おかげで，数十枚もの外国切手が娘の切手帳を飾っている。（ちなみに，先生は，ロータリー・クラブの日本代表のお一人で，世界の各国から手紙がお手もとに送られてくるのである。）

このことは先生の律義さを示すエピソードとしてここにご紹介しておきたいと思う。

私は，これまで入江先生とは，バスの中で，しばしば同席させていただいたのであった。その折は，静かな口調でいろいろとお話しをしてくださった。遂には，それが大学への行き帰りの，私の楽しみになった。私自身も英国のこと，英文学のこと，などなどについて質問させていただいたのだが，そのたびごとに先生の即答が返ってきた。先生の博覧強記は，驚きの種であった。先生のそれとない，滋味掬すべき数々のお言葉は，そのひとつひとつが今でも脳裡に焼きついている。

それからまた，私は先生に，「いつかぜひ何かご本を出してください」と，お願いしたことがある。「教室でしゃべっているからね」という，ご返事がはね返ってきた。先生の汲めども尽きせぬ，ご学識を惜しむ私は，一部の学生ばかりだけではなく，世の多くの人びとにもわかち与えていただきたいと願うからである。先生の「教壇がすべてだ」との思いは，恩師・市河三喜先生ゆずりのものに違いない。

なかんずく，シェイクスピアに対する，先生のご造詣の深さは，まことに驚嘆に値するものである。この並びなき大文豪を文字通り自家薬籠中のものにしておられるのだ。先生の謦咳に接する幸運に恵まれた学生たちが羨しい！

「太陽は今日醒めたり。薄濁る御空の気配，／黝める街の並び，鈍色に陽影渡れば／世の人は早も起きいで，あなあはれ　罪の子故に／遠祖より世々につたへし　生業に心を絞る。／長き夜を踊りあかせし　蕩児等も吾家にかへり，／徘徊る夜の剽盗も　山住みの洞に籠りぬ。／夜をこめて　本読む者も　漸くに筆を捨てつつ／痺れたる眼を閉ぢて　心ゆく熟睡に落ちぬ。／靄こむる空をかき分け　押照らす天津日影は／さまざまのこの世の姿，かなしみの人を見果

てぬ。」

この引用は，スコットの名作『湖の麗人』の「巻ノ六　武者溜（むしやどまり）」の冒頭にかかげられた「歌謡」からのものである。薄田泣菫を想起させるような調べの虜になってしまうのは，私ひとりではないであろう。先生の美しい日本語，とりわけ古語の驚くべき豊かさは格別である。先生の場合，そうした語が決して唐突な印象を与えることはなく，それぞれがそれぞれの位置におさまっていることに注目すべきであろう。先生のこうした離れ業は，シェリーやロゼッティの訳業にも見られるのである。しかも，このような稀有の業績が，三十歳代の先生によって成し遂げられているとは！

人間として，はたまた学者，教育者として，かけがえのない入江直祐先生をお送りしなければならないのは，わが創価大学の一大損失であり，一大痛恨事であるに違いない。しかしながら，先生ご高齢のこと故，それもいたしかたのないところであろう。

先生は，かつて講演会で，教室会場を学生で満たし，はみ出した学生を廊下に釘づけにされたことがあった。本学としては，二度と見られぬ，珍しい「事件」であった。このことは，とりもなおさず学生たちの先生に対する敬愛の念を如実に物語るものである。彼らも先生のご退任をどんなにか残念がっていることであろう。

私たちとしては，「先生，いつまでもお健やかに！　長い間，ほんとうにご苦労さまでした。これからは，悠々自適を旨として，お過ごしください！」と，お祈りするほかないのである。

そして，奇しくも，次の詩行ほど，先生に対する私自身の惜別の情を，美事に表わしてくれるものはほかにない。

「魅（まどは）しの一節（ひとふし）すらも　消（け）ぬがにも響を寄せず／いまははた聞えずなりぬ。――いざさらば，妖（あや）しの緒琴。」『湖の麗人』―「跋詩」より